

## 天理教伝道史概観

本教伝道の歴史は教祖のおたすけ（救済）から始まる。教祖のおたすけを受けた人がお礼に訪れた時、「人を救けるのやで。あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」と仰ったと伝えられる（『稿本天理教教祖伝逸話篇』100）。これが本教伝道の基本理念であろう。

伝道の目的はおたすけであり教勢拡大ではない。伝道の結果信者が増え教会が設置される。伝道成果が各地に現れて教勢が拡大する。

教祖のお言葉を受け、たすかった喜びを人に伝えようとした人々のおたすけは次第に遠方へ広まっていった。教祖ご在世中に奈良県をはじめ、大阪、京都など近隣に広まった。先に信仰していた人から声をかけられ、教えに触れた人の多くも教祖のもとに帰り、直接教えを受け信者となった。不思議なおたすけの噂を聞いた人がおやしきに帰り、教祖の救済に浴したのである。

本教伝道の黎明期には教祖のおたすけが噂話として伝わっていった。このような伝わり方は当時の生活圏を考えると一定の範囲を越えなかったであろう。短時日に遠方へ伝わるものではない。したがって、教祖ご在世中ではごく一部の例外を除いて、奈良県とその近府県の限られた範囲に信者が存在した。

ところで教祖が現身をお隠しになった頃の天理教信者はどれほどいたのだろうか。明確な数はどこにも書かれていない。推測すれば数万人程度であろうか。ところが10年後、明治29年末の調査では300万人を超える数の信者が統計に表れる（『道の友』明治30年2月号）。本当だろうか。どんな方法で統計をとったのだろうか。2分の1もしくは3分の1が実数だとしても大変な伸展である。この時期、いったい何が起こったのだろうか。

明治21年4月本教は教派神道の一つである神道本局の部属教会となった。それ以前は公許を得ていなかったため信者が増えると存在自体が目立っていた。この当時、日本は近代国家へと向かう重要な時期だった。憲法制定と国会開設を成し遂げない限り欧米諸国から野蛮な国と見られ、まともに扱ってもらえないのである。明治22年の憲法制定、さらにその翌年の国会開設をまさに成し遂げんとする時期には一般民衆への統制が厳しくなる。急速に発展しつつありながら公許を得ていない本教に対して取り締まりが厳しいのは当然であった。本教側の見方はいわれなき迫害干渉であったが、政府としての事情もあったのである。

教会本部が設置されると間をおかず、各地に本部の許可のもと分教会や支教会が誕生する。すでに一教会としての規模を有していた講がいくつも存在していたのである。

教会本部と同じ明治21年に2カ所、翌22年に11カ所、さらに23年以降14、23、143の教会設置があり、明治29年末には1348カ所もの教会が全国に誕生する（『第3回天理教統計年鑑別冊』）。そして『道の友』で見ると信者数が300万人を超えるほどになったのである。

あまりにもすさまじい広がりを見せた本教に対して、当然様々な形で風当たりが強くなる。「天理教撲滅講演会」といったあからさまな干渉や書物による攻撃、また村八分のような迫害もあった。学校では信者子弟が一部教師の暴言により悔し涙

を流した。この厳しい迫害干渉は本教に反感を持つ他宗教が関わっているのではないかと想像できる。

明治20年代に激しくなった本教への迫害は、裏返せばそれだけ本教伸展がすさまじかった事を意味し、本教の伸展に最も神経をとがらせたのがその宗教団体の人たちであった。

本教への攻撃は明治29年、教祖10年祭直後の内務省訓令によって最高潮に達する。この訓令は各道府県知事に宛てられたもので、即刻警察へ通達、実施された。本教への影響甚大でこの後10年以上にわたり伝道面での大きな障害となる。

10年近くにわたる運動期間を経て、本教は明治41年11月に一派独立を成し遂げ、その後大正普請、教祖30年祭を終えて教祖40年祭を前にした「教勢倍加運動」に入る。再び明治20年代のような猛烈な伝道が展開される。この頃、別科生が急増した。

教校別科を卒業した人たちの多くが布教師となり、また教会に入り込み、信仰生活を送った。単独布教師は町に溢れ、独特の風体で一見それと分かる人もいた。外見上の格好を気にせず、食べるに事欠きながら狭い部屋に下宿し、ご恩報じだけを考えていたのだろうか。

「教勢倍加運動」は数字の上から言えば、所期の目的をほぼ達成し、本教は日本国内で最も大きな新宗教と見られるようになった。この勢いは時代が昭和に入っても続き、昭和の大普請、両年祭を盛大に成し遂げる。

昭和に入ると2代真柱の様々なアイデアにより新しい形の布教、伝道が展開されるようになる。その一つは文書伝道である。大正14年末に天理教庁印刷所が竣工し、原典（「おふでさき」、「おさしづ」）の公刊、『天理時報』の創刊、外国語文献の出版などが続く。文書の出版がどれほど布教、伝道の役に立ったかは明確ではない。数値ではかれるものでもない。

2代真柱の東京帝大卒業論文「伝道ニツイテ」用の調査が12,000人の布教師を対象に実施された。本教教会も当時は1万を越えていた。

昭和10年を過ぎると日本全体が戦時体制へと移行し、伝道活動も思うに任せなくなる。不本意ながら表面上は戦争に反対できない時代だった。『みちのとも』誌上にも「時局」という言葉が目立つようになる。

昭和20年に第二次世界大戦が終結すると2代真柱は即刻、「復元」を宣言された。これまで様々な形で悩まされてきたがこれからは自由な伝道活動ができる。教えの解き方や制度なども本教独自のものを案出できるようになった。

昭和20年代は戦後の影響が残っていたが、昭和30年以降、次第に以前のような伝道が再開される。大衆伝道の手段として演劇、映画、ラジオなども積極的にとり入れる事になる。

立教以来、本教は社会から迫害干渉を受けてきた。第二次世界大戦が終結して初めて自由な信仰、布教活動ができるようになった。

（浅学な筆者では本教伝道史の全てを書き表せるとは思えない。高野友治、金子圭助両先学の業績を私なりの方法で解釈するのが本連載のねらいである。）